

## 埋葬に係る実践事例



推進校は、飼育動物が死亡した際に、児童に生命の尊さを伝える取組を実施しています。また、学校担当獣医師から、遺体の検案、埋葬場所の準備、埋葬の処理などについて支援を受けています。



### 品川区立台場小学校

#### 【実践の概要】

- 13年間、飼育していたウサギが、老衰で息を引き取りました。学校休業日の土曜日でしたが、学校担当獣医師が、すぐ遺体の検案から、埋葬の手配までしてくださいました。

後日、1・2年生の生活科の授業で、学校担当獣医師から検案の様子やどこに埋葬したのか、お話頂きました。



#### 【学校担当獣医師や保護者等との連携】

- 学校で飼育しているウサギが死んでしまった場合、学校担当獣医師による、検案が必要です。また、埋葬場所はどうかといったことも、大きな問題です。
- 生き物を飼育している以上、死は避けられないものであり、日頃から掛かり付けの学校担当獣医師がいてくださると、死亡した際の対応が、素早く適切なものとなります。飼育動物が死亡した際の、対応の手順を明確にしておくことが大切であると痛感しました。

#### 【児童の反応】

- 児童は、13年飼育していたウサギが死んだことを、月曜日の朝、登校して知りました。飼育委員の児童は、体調が良くない状態が続いていたので、ある程度覚悟はしていましたが、低学年の児童にとって、かわいがっていたウサギが死んでしまったことはショックなことであり、その後どうなったのか心配していました。

次の日に、学校担当獣医師と連携した授業を行い、学校担当獣医師から、検案の時のウサギの様子を教えて頂いたり、埋葬された場所の写真を見せて頂いたりすることで、安心したようでした。